「水べ環境都市づくり」

水べからのまちづくり

博多観光鳥瞰図（吉田初三郎 画）

2009 年３月福岡市議会

補足質問 2008. ３. ５

民主・市民クラブ

玉井輝大

目次

（１問目）

１．　背景（主旨）　・・・１

２．　現状について　・・・３

＜「地域の歴史展示のネットワーク化」について＞　・・・３

学校、公民館での地域・水べの歴史資料の保管状況は？

博物館での水べの歴史展示、民俗史的な取り組みは？

＜「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」について＞　・・・４

NPO で環境保全活動を行っている団体の動向は？

河川愛護団体の動向と支援策は？

＜「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」について＞　・・・５

近年の豪雨と本市における被害状況は？

ハザードマップ作成と防災情報の伝達は？

河川管理の県からの移管は？

（２問目）

３．　提案します　・・・６

＜「地域の歴史展示のネットワーク化」について＞　・・・６

公民館における地域の歴史に対する取り組みは？

公民館における水辺に関する取り組みは？

＜「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」について＞　・・・７

福岡市は NPO とどのように関わっており、今度どう関わるのか？

＜「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」について＞　・・・７

「水辺と居住の中間領域」の導入に関して考えは？

都心部での水辺環境整備は？

（３問目）

４．　これからを展望　・・・８

＜「地域の歴史展示のネットワーク化」について＞　・・・８

小学校や公民館などにおける地域の歴史展示のネットワーク化は？

＜「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」について＞　・・・９

市有未活用不動産の市民の手による期間限定での活用について？

NPO 活動支援基金の現状は？

＜「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」について＞　・・・11

市民や企業との連携での「水べ環境都市づくり」への市長の所見は？

※この報告書は、玉井の質問原稿と当局回答概要から作成しております。正式な会議録は、議会事務職のホームページ＜ http://asp.db-search.com/fukuoka-c/dsweb.cgi/ ＞でご確認ください。

１．　背景（主旨）

（１問目）

お元気サンです！　民主・市民クラブを代表し補足質問をさせていただきます。今回は、「地域の歴史展示のネットワーク化」、「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」、「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」以上、３点を質問いたします。

（背景・主旨）

私はいま水にテーマ絞った都市（まち）づくりをうったえています。「『水かおる早良区』～“心地よい時間”の流れるまちづくり。水べを緑できれいに。“安全”は公で、“心地よさ”は地域で。」と。それは、「水があって、緑があって、いのちが宿り、そこではじめて人間が生きていける」と思うからです。すなわち、持続性のある私たちの都市（まち）づくりの基本要素は水だと思っています。

大きく海が入り込んだ住吉神社の絵馬。荒江、草香江、片江など“江”のついた地名の分布、室見川流域の吉武高木遺跡、貿易船が出たという西入部、たくさん楠木が埋まっていた大楠。福岡平野には水城（みずき）が築かれ、福岡城は水じろであったと言われています。いま大濠が残り、天神まで来ていたという肥前堀。江戸時代の博多の街は那珂川、石堂川と堀で囲まれていた環濠都市であった。などなど水べと共に福岡が建設されてきた、たくさんの事跡が残っています。同じような都市史的形跡は、広く日本全国に見うけられ、濠に囲まれた都市が日本の都市の歴史的特徴とされています。その原型は、弥生の始まり、板付遺跡に代表される福岡平野にあるのです。

「博多灯明ウォッチング」ＨＰより

郷土史家の筑紫豊さんによると、“博多”の地名の起こりは、「はねのかたち」と書く“羽形”ではなかったか、とありました。私は、まったくの自説ですが、“かた”は“かたち”の字ではなく、干潟の“潟（かた）”で、羽の形をした“羽潟（はかた）”。あるいは、そこで船が停泊する、泊まる“泊潟（はくかた）”のほうがふさわしいのではと思っています。

このように博多の都市（まち）は水べから発達した都市（まち）なのです。

次に、野芥には地下鉄野芥駅のシンボルマークになっている「椿水路」が流れています。江戸時代、ひと冬で人々がみずからの手で築き上げた、椿井堰からの水は、櫛の歯のように広く早良の地を潤しています。しかし、いま市街化により、その大半が地中に閉じこめられ、見えなくなっています。にもかかわらず、大事業をみずからの手で成し遂げた歴史を誇らしげに語る早良の人々に、そのスピリットを継承しようとする意識を、私は感じています。

イギリスで８０年代から始まった、市民が主導し企業、行政、専門家を巻き込んで“グランド”、地面をそこにふさわしい形にしていく「グランドワーク・トラスト運動」が日本でも、展開されて来ています。福岡県でも活発な活動が報告されています。本になっている静岡県三島市の活動報告を読むと、これまでの巨大集中ではない、人々の手による分散建設、分散管理、分散治水の水べ造り活動だと理解できます。

このように市民みずからの手によるまちづくりが復活してきています。

世界には、ベニス、アムステルダム、ロンドン、パリなど、水と一緒にイメージされる魅力的な都市がたくさんあります。それに韓国、ソウルが加わりました。２００５年１０月１日、ソウルの都心で、高速道路と共に暗渠化されていた川、チョンゲチョンが地中から太陽の下に姿を現しました。１年ほど前、その現場を見に行きました。都心で復活した水べの賑わいは、車中心のライフスタイルが水べを道路に変え、水を地中に追いやり続けていると思っていた私には、新鮮な驚きでした。

いま、日本も人口減社会に入り始めています。これまでのように車に依存して市域を拡大させることなく、コンパクトに質の高い居住地域を造っていくことが出来るようになって来ているのです。自然を、いのちを感じることが出来るエリアを、水べと共に市街地の中で計画的に、連続する形でつなげていく。このことにより、住み良いといわれる福岡市の市街地を、水べ環境をシンボルとした、より価値の高いものにしていく。

このような「水べ環境都市・福岡」をふたたび造り始めたいと思います。

１． 現状について

まず、

１．　現状についての質問、から始めます。

①「地域の歴史展示のネットワーク化」についてです。

まちの歴史を明確にすることは、そのまちの未来を構想する基礎となるものです。歴史は他の場所では真似できないものを必ず秘めています。しかし、人々の手による椿水路のような歴史はあまり残されていません。城の原小学校の山口裕之先生が田隈小学校にいらっしゃった時に、ねばり強く聞き取り調査をされ、それを劇の形にし、小学生に、地域に広がり、そして、地下鉄のシンボルマークになった。人々によるまちづくりの歴史を明らかにするのは、手間のかかる仕事です。しかし、まず、そのことから始めねば。

＜回答＞

・早良区２４公民館において、地域の関市に関する冊子を保管している公民館は、９館あります。また、地域の歴史に関する展示などを行っている公民館が５館あります。

　→冊子の作成者の例；歴史サークル、校区史誌編集委員会、歴史研究グループなど。

・早良区２５小学校において、２５校全部の学校で周年行事の記念誌を保管しております。

・また、水べなどの写真などが記録されているのは、１８校区あります。

　→油山川など校区の水べの写真や絵

　→校内ビオトープなど水に関わる自然環境の写真など。

田隈小１００周年記念事業で、記念誌が作られました。そこには地域の歴史が写真付きで語られています。昨年早良区では周年事業がいくつもあり、どこも程度の差こそあれ、記念誌が作られていました。このような冊子を地域でつくっているところは多いのではないかと思います。そこでお尋ねします。地域の歴史を記録した冊子を、早良区２４の公民館で保管している所が、何館あるのか？　あわせて、早良区の２５小学校で周年行事の記念誌を保管している学校は何校あるか？　そのうち、水べの写真などが記録されている学校は何校あるか、教えてください。

＜回答＞

・博物館では、福岡・博多が２千年を超える我が国の対外交流の拠点だったことをメインテーマに、主に海を舞台とした歴史を展示している。

　・水辺に関する展示は、部門別展示室で平成 20 年 11 月から翌年１月末まで、川における特徴的な漁法などを紹介する展覧会を開催した。

・資料収集は、本市の歴史や文化を物語る貴重な資料や、河川で使用された漁撈 (ぎょろう) 具を調査・収集し、保存・展示していく。

・市史編さん事業における民俗の分野は、主に都市部における聞き取り調査に力をそそいでおり、その後、学問的に検討をした上で必要と認められたものを記録していく。

また、大切な地域の歴史であっても、それを収集・展示する場が殆ど無いなど、歴史の保存状況はよくありません。郷土の歴史を知ることによって市民は地域に誇りを持つものです。たくさんの貴重な歴史資料が失われているのではないでしょうか？　特に、歴史的な水べの記録を目で見える形で展示する。ここでお尋ねします。福岡でそのような水べの歴史展示を博物館でやってはどうか？　現状でどの程度やっているのか？　博物館での水べの記録の収集と展示の実態はどのようなものか？　市史編纂作業が進んでいるが、民俗史といったものを聞き取りを中心に採取し、記録することは考えているのか？　教えてください。

②次に「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」についてです。

まずは自分で出来ることからと思い、いま、毎週日曜日油山川の水べ掃除をしています。さらに、掃除に加えて、水べ観察を市民の手で日常的に行うことも始めました。そして、この「おそうじ」と「水べ観察」の２つの活動のためのホームページも「水の杜活動」と銘打ち、作りました。この２つの活動の記録を蓄積し、公開し、油山川の管理、今後の整備に生かしたい。

テーマを絞った市民活動を始めるには、実務が解った専門家の協力が必要です。たとえば、森林に入って市民が間伐をすることなどには危険が伴います。しかし、専門家の指導があれば、出来ないことはない。そのような技術を身につけた市民ボランティアが増えてくれることは、森林や水べの管理に、とてもいいこと、と思います。

ここでまず、ＮＰＯとボランティア団体の現状を、お伺いいたします。本市にあるＮＰＯ・ボランティア団体のうち、環境の保全を図る活動を行っているＮＰＯ・ボランティア団体はどのくらいあるのか？ また、ここ数年の傾向はどうか？

＜回答＞

・NPO・ボランティア交流センターに利用登録を行っているNPO・ボランティア団体は平成21年１月末現在705団体。

・このうち環境の保全を図る活動をおこなっているNPO・ボランティア団体は153団体。その割合は、全体の21.7%。

・平成１８年度末の利用登録団体は553団体、うち環境の保全を図る活動を行う団体は115団体（20.8%）であることから、ここ数年増加している。

さらに、本市が管理している河川の愛護活動をおこなっている登録団体の数、および登録数の推移はどうなっているのか？　また、その支援策の内容について、教えてください。

＜回答＞

・登録団体数は増加しており、現在、１２団体となっている。

・本市の管理する河川の清掃及び除草その他の河川愛護活動を行う団体に対し、「河川浄化報償金制度」を設けている。

③次に、「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」についてお伺いします。

○室見川水位情報

「福岡市防災・危機管理情報」ＨＰより

水べ環境都市づくりには、「防災的な事業」と、チョンゲチョンのような「都市の魅力を高める事業」があると思います。前者は市民生活の安心･安全にかかわる重要なものであり、後者は都市づくりの象徴となり、都市戦略につながるものです。

これまでは治水基盤の整備により、水害の頻度が減少傾向にありました。しかし、近年はそれが微増傾向となり、資産価値の増加などから被害額も増大してきています。さらに、昨年は局地的豪雨、いわゆるゲリラ豪雨による被害が発生しています。そこで、お尋ねします。近年の豪雨と本市における水害の現状はどうなっているのか、教えてください。

＜回答＞

・地球温暖化などによる気象変化から、全国各地で記録的・局地的豪雨が発生。
・昨年、７月２８日に兵庫県の都賀川で水難事故が発生。
・本市では、近年、平成１１年、１５年の記録的豪雨により博多駅周辺をはじめ、各地で甚大な浸水被害が発生。
・昨年は、本市でも局地的豪雨が発生しており、今後も被害発生が懸念される。

治水面でまずやるべきことは、危険地区をきちんと本人だけではなく、各種業界にも伝える。市民みんなが日頃から危険度を知って生活することだと思います。情報をきちんと与え、住民にきちんと準備していただく。そのためには、まず、危険を知らせるマップつくる。さらに､現地で危険度を表示し、次に、建築形態を指導する、などとなっていく。

室見川のハザードマップが年度内に配布されると聞いています。そこで､お伺いいたします。福岡市の主要な河川のハザードマップはすべて作り終えたのでしょうか？　その配布状況も含め、今後、水害や水難に対する防災情報の伝達をどのように考えてあるのか？　教えてください。

＜回答＞

・ハザードマップの作成状況
・ハザードマップの配布状況と携帯電話を使った防災メールの普及促進
・水難事故防止のため、親水整備箇所に注意情報等を記載した看板を県と連携し設置を進める。

水べ活動をしていると、周辺住民の方々からいろいろな提案をいただきます。それらを追いかけてみると、２級河川の管理がとっても分かりにくいという事実に遭遇します。市が権限を持っていればと思うことが何度もありました。お尋ねします。現状での市民にとって河川管理領域の不明瞭さをどうお考えでしょうか？　また、いつ頃、県からの管理移管を実現するつもりか？　教えてください。

＜回答＞

・二級河川の管理者は福岡県で、準用河川、普通河川の管理者は福岡市であるが、二級河川については、整備手法として福岡市が実施しているケースがあり、市民にとって分かりにくいと思われる。
・河川の管理権限委譲については、引き続き県に要望していく。

次に、多々良川下流では、すでに河川区域を都市計画決定し、福岡県で整備が進められています。そこでお尋ねします。この河川を都市計画決定した理由と用地取得の状況や事業の進捗状況を、また、この河川区域内において用地の買い取り要望があった場合はどのように取り組まれているのか？　教えてください。

・改修予定区域において、マンション計画との調整に難航し都市計画決定の必要性が高まったことから、平成１０年８月に決定。
・平成１９年度末において、用地取得は８６％、工事は７７％の進捗となっている。
・都市計画区域について、買い取り要望があった場合は、予算の状況を勘案しながら用地取得に努めている。

以上で１問目を終わり、２問目からは自席にて質問いたします。

（２問目）

４６番。ありがとうございました。

２．少し提案、します。

①まず、「地域の歴史展示のネットワーク化」についてです。

学術的な取り組み、としてではなく、市民が、少し古い水辺の写真を集め、展示し、これからの水べの環境づくりを市民みずから構想できるような場を設けることを提案します。

田隈小１００周年で、田隈地域の昔の写真が展示されていました。古い写真を見ると昔をしのぶとともに、今を考えてしまいます。地域の歴史の共有は、地域意識を生み出す原点になると思います。そして、昔の写真はまちづくりの地域ビジョンをまとめるために、無くてはならないイメージになります。あまり古くない写真も、きちんと保管し、時間がたてば、歴史資料になる。少し前の古い水べの写真を水べのある公民館に展示することを進めていきたいと思っています。

先ほど、早良区の公民館における歴史の保管状況はお答えいただきました。ここでお尋ねします。地域の生涯学習施設である公民館における地域の歴史に関する取り組みや活動がどのような状況なのか？　また、早良区の小学校１８校において水べの写真などが記録されていることのことですが、公民館における水べに関する取り組みの状況についても、あわせて教えてください。

＜回答＞
・公民館においては、地域における生涯学習を推進する施設として、住民の主体的な活動を含めて地域の歴史に関する様々な取り組みをしております。
・具体的には、地域の歴史を学ぶ主催事業を行ったり、住民のサークル活動への支援、歴史の資料の展示などを行っております。
・また、水べに関する取り組みについては、川における自然観察などを流域の公民館などにおいて、全市で１４館で実施しております。
・校区によっては、歴史の柱にしたまちづくりを進めている校区もあり、公民館における学習の成果を生かした人材育成など、今後とも校区の状況に応じた取り組みを支援していきたいと考えています。
　→公民館での地域の歴史展示；全市３６館／１４４館中。
　→水べの自然観察などの事業実施（川の野鳥観察、川の生き物観察など）；全市１４館／１４４館中。

②続きまして「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」についてです。

「グランドワーク福岡」ＨＰより

＜回答＞

・場の提供や NPO 会計税務などの専門家による支援など、あすみんを中心に NPO 支援を実施。
・現在、福岡市では NPO に対して補助、共催、指定管理、委託などを行っており、また、平成 20 年度には共働事業提案制度も導入。
・NPO・ボランティア活動などの市民活動については、自主的・自発的に行われることが基本。
・今後は、共働事業提案制度の活用などにより、市と NPO のパートナーシップを強化するとともに、地域をはじめ企業、大学などと NPO との連携をすすめていく。

市民主導のまちづくり活動を活発化するために、「グランドワーク・トラスト」のような、市民、行政、企業の連携に専門家が絡むトラスト、信頼の組織が、ＮＰＯとして成立する仕組みを研究していただきたい。また、公的事業に置いても、計画段階から、市民、企業、実務の解る専門家など、なるべく多くの人が関わることが必要だと思います。「グランドワーク三島」は、水べの市民組織やＮＰＯをネットワーク化する仲介ＮＰＯの役割を果たしています。このような仲介ＮＰＯを意識してつくり出すことも必要だと思います。ＮＰＯの本家アメリカでは、ＮＰＯを支援するＮＰＯを行政も関わってつくり、特定の事業を振興している例も見受けられます。

行政のＮＰＯとの関わり方には、1）ＮＰＯを行政も関わってつくる、２）経営的にスタッフを出して関わる、３）ＮＰＯが専門家の支援を受けられるようにする、４）公的な仕事をＮＰＯに発注する、５）ＮＰＯの活動を支援する補助金を出す、などがあると思います。そこでお尋ねします。現在、福岡市はＮＰＯとどのように関わっていますか？　また、今後はどう関わっていくべきだと考えていますか？　教えてください。

③次に、「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」についてです。

チョンゲチョン復元後（仮想鳥瞰図）

＜回答＞

・河川は、市街地における貴重な連続的な自然空間であり、生物の生息環境や住民の憩いの場として水辺と緑地の整備は重要と認識している。
・河川整備については、地域や河川の特性を踏まえてまちづくり等と一体となって河畔公園、遊歩道や身近にふれあえる水辺環境整備に努める。

ここでは、「人間が居住し活動するエリア」と、「水」の間に、水害に備えるとともに、いのちの宿る、環境の場としての中間領域、バッファーゾーンの導入を提案いたします。

水は時として暴れ回ります。だから、水と人間が活動する区域の間に、中間領域を導入する。そこが、結果として「いのちの地域」になる。光を浴びて緑が育ち、昆虫が、鳥が、動物が、いのちを育む土地になる。そして、そこは人々には憩いの場となり、ヒートアイランド化した、都市環境に冷気を送り込む源ともなります。

ここでお伺いいたします。このような河川区域ではない「水と居住の中間領域」の導入に関して、その現実性についての現時点での所見をお聞かせください。

＜回答＞

・博多川では、平成３年度から環境護岸、堰、植栽等を整備し、現在、河床掘削に合わせ底質の改善を実施中。

・地域の商業団体やＮＰＯなどとともに、那珂川、博多川を活用した都心のにぎわい創出に向けた取り組みを行っている。

・引き続き、河川の利活用を支援し、賑わいの創出促進に努める。

次に、福岡市も、その水べとともに発展してきた歴史に基づき、都心において、水べの復活の象徴的事業を考える。歴史と自然にしたがい、美しいものができあがれば、多くの人がそこに集まってくる。お尋ねします。現在、都心部での水べ環境整備として、具体的に取り組んでいる内容と、今後の展開について、どのようなことをお考えなのか、教えてください。

以上で２問目を終わります。

（３問目）

４６番。ありがとうございました。

３． 少し、これからを展望

①まず、「地域の歴史展示のネットワーク化」についてです。

「エコ・ミュージアム」という言葉があります。これは、環境ミュージアムということではなく、「ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた自然や文化、生活様式までも含めて、環境を、総体として持続可能な方法で研究・保存・展示・活用していく実践」と思ってください。「エコ・ミュージアム」は、住民が参加し、展示資料の現地保存、運営などをおこない、地域を見直し、その発展を目指すことに重点があります。

多くの地域拠点での写真と歴史の展示が「エコミュージアム」を形成する。それを市立博物館が指導し、収集素材のレベルを保ち、全体として、「日本で一番古い水べから発達した都市・福岡」の歴史を蓄えていく。そして、このように地域の展示がネットワーク化されてできた福岡の「エコ・ミュージアム」は、「日本で一番古い水べから発達した都市・福岡」の歴史を全体として展示するように育っていく。

○ネットによる地域住民史保存例

「博多・冷泉のあゆみ」ＨＰより
[http://www.asocie.jp/reizen/archives/s31sports/index.html]

この「福岡エコ・ミュージアム」は、欧米の主要都市にあるような、みずからの「都市史」を展示する博物館へと成長していく。さらに、将来的には、日本の都市の発展史を展示する日本初の「日本都市史博物館」へと成長させる。それは都市文化に関心がある世界からのビジターを集め、日本文化の理解を深める国際的な文化機関としての機能も果たしていく。そこまで夢をみたい。

このように、私は、エコ・ミュージアムの観点から、水べの昔の写真や歴史的なもの、あるいは伝承されてきた風俗などが、保存されたり展示してある小中学校や地域の公民館を連携して、市立博物館によって、地域の歴史資料の収集・保存・展示が出来ないかと考えます。そこでお尋ねします。このようなことに関する市立博物館の関わり方、役割について、ご所見をお聞かせください。

＜回答＞

・博物館では、昔の写真や川で使用された漁撈（ぎょろう）道具などを含め、本市の歴史や文化を語る貴重な資料を収集し、保存・展示してきた。

・今後も、学校や公民館などと連携し、後世に受け継ぐべき貴重な資料と認められるものは収集し、保存・展示をしていく。

②次に「市民ボランティアなど市民の力の活用と支援」についてです。

いま日本経済は一層の深刻化が進んでいます。そのような中、雇用維持の観点から、公共事業を積極的に展開することが求められ始めています。２１世紀の雇用対策は、環境に舵を向けるニューディールとすべきです。ニューディールは環境を商売にする企業へ、ではなく、環境のために働く人へ直接お金が行くことが重要だと思います。水べ都市福岡では、水べニューディールを展開する。荒れる山林に入って間伐してもらう手間に。水べという水べに美しい並木をつくるのに、水べの管理に、人手を入れる。今だからこそ、これまで放置されがちだった自然に、歴史に人手を入れる事業に財政を出動させる。

もちろん、ＮＰＯによる環境に対する取り組み、特に、「グランドワーク・トラスト」のような遊休地に対する市民主導での、企業、公共、専門家を巻き込んだ、実際の地面仕事へ財政を振り向け、雇用拡大にもつなげる。

＜回答＞

・水べ近くにある市有財産で、現在未利用のものは、売却予定が１件、行政による活用予定が１件、今後、売却或いは活用を検討するものが３件、合計５件で面積が約２万８千平方メートルとなっています。

・また、未利用地は、財源確保のため基本的には売却を進めているが、今後行政において活用する場合あるいは売却までの間、暫定利用を行う場合は、提案の市民や専門家を交えた活用方法なども参考とし、未利用地の個々の状況、周辺環境、行政の利用目的、地元の意向などを踏まえながら、効果的な活用方法を検討したいと思います。

そこでお尋ねします。財政当局で把握している市有不動産で、当仁中学校跡地のような水べ近くで未活用のものがどれだけあるか？　さらに、そのような未活用の市有地を専門家を交えた市民の手で一定期間に限り活用していくことについて、どのようにお考えになるか教えてください。

私は、ＮＰＯ活動への公的支援では、ＮＰＯへの寄付に対して、税制面での恩典を与えることが一番重要だと思います。通常、直接ＮＰＯ法人に寄付をした場合、その法人が認定ＮＰＯ法人でなければ、税制面での恩恵は受けられません。しかし、福岡市には、市民からの寄付をもとにＮＰＯ活動に助成をおこなう「ＮＰＯ活動支援基金」というものがあります。この基金に寄付すれば、税の優遇が受けられる。しかも、寄付する人は、支援したい活動分野やＮＰＯ法人を希望することもできるのです。すなわち、この基金を活用すれば、応援したい法人を直接お金で支援することができ、しかもお得になる。水べ環境整備のために、この「ＮＰＯ活動支援基金」の活用を私は強く呼びかけます。行政の方でも、積極的な宣伝、周知徹底をお願いします。

＜回答＞

・平成 16 年度から、平成 21 年 1 月末までの寄付件数は 56 件、寄付総額は 872 万 1 千 173 円

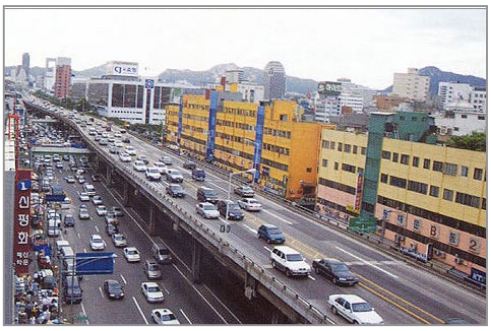
・このうち環境保全分野の希望付き件数 1 件、寄付金額は 1 万円

・環境保全団体への法人希望付き寄付件数 0 件

お尋ねします。現時点で、ＮＰＯ活動支援基金へのこれまでの寄付の件数と寄付受入額、そのうち環境保全分野への助成の希望があった寄付の件数と寄付受入額、さらに特定の環境保全団体への助成の希望があった寄付の件数と寄付受入額を教えてください。

③最後に、「水べ環境整備と水べ環境都市づくり」についてです。

水べ復活は、車との戦いです。水を地中へ埋め続けてきた車中心の都市造りから、持続可能な都市へと向かう水べ復活のためには、これまでの都市計画の基本的な考え方を改めなければなりません。交通体系、居住地のあり方は？　商業・業務地、文化地域は？　連続する水のエリアはどこにつくり出すべきか？　などなど、具体的な都市計画に新しい考え方を反映させなければなりません。



チョンゲチョン復元前

チョンゲチョン復元後（仮想鳥瞰図）

「緑の基本計画」で福岡市の緑化マスタープランを定めています。同じように、福岡市を水べ都市として明確に造り上げるために、福岡市全体での水べの連続配置形態を示し、その実現のための具体的事業とその目標値とを定めた「水べ環境基本計画」を作る必要があります。パタン化している公園を削ってでも水べを造る。その計画を通して、他の都市と大きく違った、水べ環境都市・福岡の未来イメージが浮かび上がってきます。

チョンゲチョンは、単に水べを復活しただけでなく、ソウルの交通、商業活動までも、同時に改善し、持続可能な都市へ向かう成功でした。しかし忘れてはならないことは、３年という短期間で完成させた都市改造事業の背景には、市民団体と公共だけでなく、交通事業者、商業者など企業を“連携”する活動が、完成の１５年ぐらい前から開始していたという事実です。

福岡市は、基本構想の都市像の一つに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げています。これからのまちづくりを進めるにあたっては、福岡が水べから育った街であることを踏まえ、「水べ環境基本計画」を策定し、都心での「水べ環境整備」をすることが重要であると考えます。そこでお尋ねします。市民や企業など多様な主体との“連携”のもと、水べを大切にする環境都市づくりを積極的に進めるべきと考えますが、市長のお考えを伺いまして、私の質問を終わります。

＜回答＞

・現行の基本計画等に基づき、水辺環境に配慮した河川やため池の整備のほか、海浜公園の整備等を進めてきた。
・水や緑を大切にするまちづくりは、市民生活の豊かさや都市の魅力向上にとって非常に重要であると考えている。
・今後とも多様な主体と連携しながら、河川や海辺などにおいて、魅力ある親水空間の創出を図り、うるおいや安らぎを感じるまちづくりに積極的に取り組んでいく。